

拍子木

若松 下手出

歌「金武節」

照る太陽や西に 布だけになても

首里みやだいらやてど 一人行きゆる

若松

我ぬや中城 若松どやゆる

みやだいらごとあてど 首里にのぼる

二十日夜の暗さ 行先や迷て

ことに山路の 露も繁さ

あの村のはずれ 火の光頼て

立寄やり今宵 明し欲しやの

若松 上手奥向かって唱える

此宿のうちに 物知れしやべら

旅に行暮れて 行先もないらぬ

御情に一夜 からち給うれ

宿の女 上手で唱える（カゲ）

女

たるゆ夜深さに 宿からんで言ふすや

親の留守やれば 自由もならぬ

若松

露でやんす花に 宿かゆる浮世
慈悲よ御情に からち給うれ

女

親の留守なかに 宿からち置て
与所知れて我ぬや 浮名立ちゆめ

若松

親の留守てやり 自由ならぬで言ふすに
繰返ち又や 言ひぐれしやあすが
我ぬや中城若松どやゆる

みやだいらりごとあてど 首里にのぼる
二十日夜の暗さ 行先も見らぬ
戻る道ないらん 行詰てをもの
たんで御情に からち給うれ

女 上手出（手燭持）

歌「干瀬節」

里と思ばのよで いやで言ふめ御宿
冬の夜のよすが 互に語やべら

二人座る

若松